

第47回 第一ブロック協議会 開催報告

本会の港、千代田、新宿、中央支部で構成される第一ブロックでは毎年8月に各支部趣向を凝らして懇親を深める機会を設けています。今年は港支部が幹事となり、「第47回 第一ブロック協議会」が、平成25年8月28日 東京プリンスホテルにて開催されました。



安全安心な街づくりの願いを込めて、長島 忠美 衆議院議員を迎え、「大地震経験からの提言」と題してご講演頂きました。講演要旨を報告いたします。

【長島 忠美 略歴】

昭和26年1月9日（61歳）新潟県古志郡山古志村（現、長岡市山古志）に生まれる。
東洋大学経済学部卒業後、都内で就業し28歳で帰郷。

山古志村教育委員・同村議会議員を経て、山古志村長就任（在職：平成12年～17年）

村長在任中の平成16年10月23日、新潟県中越大震災に遭遇。中心被災地 山古志村にて連日、陣頭指揮にあたり、いち早く全村民避難という英断を下したことを高く評価されメディアでも話題となった。復興活動においては、被災者の精神面での救済にも力を注ぐ。

平成17年3月、山古志村が長岡市に合併されたことにより村長を退任、引き続き復興事業推進のため、長岡市復興管理監に就任。

平成17年8月の衆議院選挙に出馬し初当選。

平成24年12月、3期目の当選を果たす。

現在、農林水産大臣政務官兼復興大臣政務官

自由民主党 衆議院議員

同党新潟県第五選挙区支部長

平成21年4月～平成24年12月、出身校である東洋大学理事長を務めた。



冒頭、地域防災が叫ばれる中、長島 忠美 衆議院議員 自身が当時の山古志の実情を他の地域の方々に知って貰うために[地震発生数ヶ月後に作成されたビデオ](#)が流れ講演は始まりました。

【長島 忠美 衆議院議員からのメッセージ】

平成 16 年 10 月 23 日、新潟県中越地震発生！あれから 9 年の月日が経ちました。当時、同年 12 月 14 日にこの冒頭に流れたビデオテープを東京で配ったことを思い出します。
また、当時の山古志村復興の為に、他の自治体からの職員の派遣協力など様々な応援を頂いたことも思い出します。本当にありがとうございました。

1. 私の提言

- ・ 自然災害は誰のせいでもない。
- ・ 災害は平等に訪れるものではないので、いろいろな復興の在り方がある。
- ・ 大きな災害の一つ一つを受け止めて行くことが大事なこと。
- ・ 住民の身になれば、あの場所には生きることに全てがあつた。復興もその目線に立って考えなければならぬ。
- ・ 外部との連絡方法を確保しておく。
- ・ 夜の行動は危険。

2. 自衛隊の派遣要請

10 月 24 日、午前 6 時 20 分 山古志中学校のグラウンドへヘリ出動を要請。山古志村 14 の集落全てが被災している。もはや一刻の猶予もない状況だった。全村民の避難を決断。

10 月 25 日、午後 3 時 全ての村民がヘリで長岡市へ避難を完了した。

3. マスコミの方へ

最後の一人として長岡市へ避難したらマスコミが待ち構えていた。マスコミからは村をどうするのか？との質問であったが、とにかく山古志村の実情をありのまま伝えて欲しいとお願いした。ありがたいことにその後、応援の声を沢山頂いた。

4. 復興へ向けて

- ・ 村民の一時帰宅 2 時間を県庁へ要請
- ・ できるだけ早く、できるだけ元の場所で！
- ・ 皆が戻った時に普通の暮らしができる様、公営住宅の様な画一的なものにはしたく無かった。
- ・ 住宅の建替えの補助には所得制限があり、制度が機能しない状況であった
- ・ 東洋大学の内田先生の力を借りてローコスト住宅の検討を行い、村民の自立再建の道筋を探った。
- ・ 自立再建からコミュニティは育つ。

5. 東日本大震災に思うこと

山古志村の場合とは違い、全てが無くなってしまった。沿岸地域の高台移転が検討されているが、漁港で暮らしていた人々の気持ちを思うと難しい。

ただ、岩手の人口は 28 万人、このままでは 20 万人まで減少する状況であり、コンパクトシティ化を目指すことも必要になるのではないかと考えている。

身の丈に合わない街づくりは駄目。50 年、100 年後の荷物にならない計画でなければならない。

6. 私の失敗したこと

①子供たちに対して失敗したこと。

惨状を見せない様にしようとしたことでした。避難から3週間、子供たちの背中が丸まっている。皆元気がない。大人たちの右往左往している様子をみて子供たちは何もできないことに疎外感を持っていたことに気付けなかった。

子供たち全員をへりに乗せ山古志の実情を見せた。皆の心が折れるのを感じた。次の朝、子供たちにおはよう！と声を掛けると、村長さんガンバッテネ！と返事が返ってきた。コミュニティが生まれた。皆、「社会の一員なんだ！」そう感じました。

②住民に対して失敗したこと。

自分たちで出来ることまで、甘えてしまっていないか？モラルハザードを起しそうになっていないか。夜中に眠れないおじいちゃん、おばあちゃんがポツンと一人でいないか。心配なので避難所を廻っていました。また、何かあったらノートに書き記す様に住民に伝えており、そのノートを確認していました。ある日、ノートには、なんの目標も立てずに何を頑張ればいいんだ！この馬鹿村長！と記されており、もっともなことだと思いました。山に帰る意義、本物の村をつくる！村をつくり直す千載一遇のチャンスである。それから速やかに復興計画を練り、2年で村へ帰る目標を立てました。

7. コミュニティ

東京ではコミュニティが薄いと言われるけれど、隣には沢山の人がいます。山古志村は人の繋がりは東京より濃いかもかもしれないが、残念ながら隣が遠すぎる！隣に人がいることが、どんなに力強いことか。私はこのような街をつくり上げた東京を羨ましく思います。どんな時にも日本人なら隣の人を見捨てて逃げるようなことはしないとします。そう思ったら、いざという時のために、隣の人にニコリ、ペコリと挨拶を交わしませんか！

8. 街づくり

これからは、住民が参加する街づくりを東北では加速したいと思っています。行政が100%つくる街づくりは加速したくありません。街とは、住むだけの場所ではありません。生きるために必要な全てが必要なのです。

緊急対応のバックアップは72時間では、対応しきれないことがわかって来ました。90時間に改める必要があるようです。

9. 身に着きたい習慣

- ・災害はいつ来るかわからない。携帯電話を肌身離さず持つ習慣を！
- ・ペットボトルを常に1本持つ習慣をつける。
- ・常用している薬は3日分を携帯する。

【まとめ】

今回の講演を通じて、私たち建築士事務所協会が住まい手の目線に立ち、より積極的に防災に強い街づくりに関与する事が必要であると感じた次第です。関係者の方々、ご協力頂き深謝します。

【講演会後の懇親会風景】



以上